



OECD 事務次長講演会

シンポジウム 「成功する留学と海外インターンシップ」

瀬尾拓史氏講演会

■玉木林太郎 OECD 事務次長講演会



7月24日(木)、工学部2号館にてOECD事務次長の玉木林太郎氏による講演会が行われました。

当日の様子を、GCLコース生の岩尾俊兵さん(経済学研究科M2)にレポートしてもらいました。

(以下、岩尾さんの執筆)

1. はじめに

財務省。官庁の中の官庁といわれている官庁である。なぜ財務省が官庁の中の官庁と呼ばれるかというと、その主な仕事は他の官庁に予算をつけるというものだからだ。財務省において国内の実務のトップは財務省事務次官、海外との窓口のトップは財務省財務官である。そして今回、元財務省財務官で現・経済協力開発機構(以下OECD)事務次長玉木林太郎氏にお話を伺う機会を頂いた。

2. (講演内容) OECD 玉木事務次長の紹介

玉木事務次官は現在60歳で、義務教育において教科書を自費で買った最後の世代である。当時は東京大学の入学金4000円授業料6000円という時代だった。

大蔵省に入り、20代半ばからOECDに出向され、20代をパリで過ごされた。奥さまとはパリで出会ったという。それ以降北海道の税務署長を経て、もう一度OECDへ。証券、主計局などを経て、新憲法下で初めての天皇陛下崩御、天皇陛下の即位にたずさわることとなる。そして1994年からワシントンの世界銀行に。その後は国際局畑で、一度日本大使館へ、その後国際局長、さらに財務官へと上り詰められた。

3. (講演内容) OECD について

役所を辞めた後はすぐにパリに。新婚生活の再開と、役所生活への飽きからOECDでの仕事を選ばれたという。OECDでの仕事は多岐に渡るため、役所に比べて飽きがこないのだと玉木事務次長は説明される。というのも、OECDは税制、マクロ経済、貿易、イノベーション、ジェンダーなど幅広く業務を行っていてやらない仕事は安全保障のみと言っても過言ではない。OECDの仕事は日替わりで仕事が変わっていくので面白いのだ。

4. (講演内容) 世界の未来・日本の未来

講演では、玉木事務次長が2060年までの世界経済のシナリオを提示して下さった。2060年にOECDが設立100周年を迎えるため、その記念として現在OECD内で作成されているシナリオである。そこで予測される2060年の世界経済にはいくつかの政策課題が浮かび上がってくる。一つは世界経済の経済成長が鈍化すること。新興国も今後高齢化していき、賃金差の解消などの要因によって経済成長は鈍化するのだ。新興国の所得は増加する(2060年で中国が日本レベルに)。世界の経済は相互依存性を高める。それによって輸入・輸出が激しくなる。一つの国での失敗が他の国に影響するようになる。新興国経済は単純作業から付加価値の高いサービス業へと労働力が移動する。その結果、製造業は先進国で42%レベルにまで減少する。

こう考えていくと、今後は労働力投入による経済成長はあまり期待できないと考えてよい。経済成長にはイノベーションと生産性向上がカギになる。そのため技能と教育が大事。逆説的だが、日本はサービス産業を中心に、極端に生産性の低い職があるため、OECD予測ではそのような職の生産性が改善されることにより日本は2060年に成長率が高まる。全世界的に15~74歳人口は減っていく。ということは人口増以外での成長を目指すべき。

では、移民を受け入れればよいか。しかし、単純労働力としての移民は、2040年ごろには本国でリッチになってしまうから呼び寄せることは不可能である。高度な知識・技能を持った移民を受け入れるという話はまったく別の話なのだ。単純労働者としての移民受

け入れが不可能となれば、あとは他国の技術者、知識人、芸術家が日本をベースに活動してくれるようにできるかが課題となる。そのためには日本を良い国、外国の人が住みたいと思う国にすることが大切なのだという。

5. (講演内容) OECD で働くということ

OECDは看板も金もない、だからこそ、いい政策を作って信頼を得る必要がある。そのため、いい政策を作れる人が重宝される。そのような観点で考えたとき、日本人は評価されているだろうか。答えは否である。日本は国際機関の局長、次長、課長が少なくなってきていて国際的なプレゼンスが低下している。国際機関に供給する人材が日本で生まれにくい。英語で話す力よりも英語でしっかり読む力、書く力があって、深い考察を基に政策を作れる人材が必要である。

6. (感想) 講演を終えて

講演が終わった後、玉木事務次長を囲んで座談会が行われた。玉木事務次長は、これからの日本について心配されていて、私も身が引き締まる思いがした。私が今回の講演から読み取ったメッセージは「日本経済の規模縮小が避けられない未来において私たちが国際的な地位を保つには二つの道がある」ということであった。一つは「OECDのような国際的な機関、国際学会、国際的なビジネスの場などで活躍する日本人が増えること」もう一つは「日本を良い国にすること」である。最近のグローバル化への対応の議論をみると前者ばかりが強調される気がするが、私は後者を地味に、一步一步目指していきたいと思った。

(本文執筆・岩尾俊兵さん(経済学研究科M2))



Global Design Symposium : 成功する留学と海外インターンシップ



7月17日(木)に、本郷キャンパス工学部2号館1階213大講義室において、GCL主催のGlobal Design Symposium「成功する留学と海外インターンシップ～心構えとサポート体制～」が開催されました(共催:東京大学大学院情報理工学系研究科、東京大学大学院工学系研究科)。

当日は、東京大学の教員による講演のほか、東京大学経済学部の卒業生である中村慎太郎氏による留学体験の講演や、船橋力氏による「トビタテ!留学JAPAN 日本代表プログラム」の紹介などが行われました。

当日の様子を、写真で紹介します。



シンポジウムの前半では、須田礼仁教授、小林克志特任准教授、川原圭博准教授、中村慎太郎氏(日本銀行)、船橋力氏(MEXT 官民協働海外留学創出プロジェクト・プロジェクトディレクター)らによる講演が行われました。



シンポジウムの後半では、講演者と、留学経験のあるコース生が登場し、パネルディスカッションを行いました。参加者からも熱心に質問が寄せられました。



■瀬尾拓史氏講演会



8月2日(土)、株式会社サイアメントの代表取締役である瀬尾拓史氏をお招きし、GCL 広報企画主催の講演会をGCL ラボにて開催しました。瀬尾拓史氏は東京大学医学部医学科を卒業した医師であり、サイエンスCGクリエイターとしての顔も持ちます。これまでの活動についてお話をいただくと共に、医療コンテンツ業界が抱える問題についても厳しい指摘をいただきました。

●瀬尾氏講演(要旨)

医療コンテンツというのは最近凄く流行っていますが、その多くは「正確なサイエンスっぽい」もの。「ぼい」というのが問題で、一見格好良く見えるのですが、患者として納得できるものではないのです。

医療CGの重要性は10年前ぐらいから言われていますが、ほとんどがこけています。それは、クリエイターが医療コンテンツを舐め過ぎて、勉強する気がなさ過ぎるからなのです。

例えば、インスリン分泌メカニズム説明の3DCG映像では、生成されるATPという分子の数がきちんと38個になっていなければいけません。このとき、「適当な数のATPを表示させとけばいいや」というのは、「野球の試合のシーンだけど、守備の人数は適当でいいや」というのと変わりません。高校卒業程度の知識は欲しいし、「あー、高校のときこんな習ったなー。調べてみよう」と自分から勉強するぐらいでないと。

逆に、専門家の意見を「偉い先生が言っているから……」となんでも取り入れようとすると、收拾がつかなくなる。COPDという肺の疾患の啓発プロジェクトでCGアニメーションを作ったときは、高名な先生からの「肺胞壁の破壊については描写しないのか」というご意見に対して、CGに時間の制限があり、既存の

描写に意味合いを含めているということでご理解をいただきました。もしクリエイターの側に知識がなければ、「肺胞壁って何だろう?」と思いつつも「修正致します」と答えてしまうところです。

学術のバックグラウンドを持った人に、コンテンツ制作の現場に来てほしい。確かに「科学コミュニケーション教育」というのがありますが、既存のプログラムではコンテンツ制作の授業・演習はほぼ無いに等しいのが問題です。

アウトリーチ・公開活動予算の扱われ方にも問題があります。大きなプロジェクトでは、広報・公開活動に2億円の予算が付いていることもありますが、シンポジウムの開催に大半が使われてしまいます。人材交流も大事ですが、ちゃんとしたコンテンツというのも同じぐらい大事ではないか、と思います。

●質疑応答(一部)

Q 分かりにくい領域をクリエイターにやってもらう、というのが第一関門?

A クリエーターの人は、ゲームとか映画とかをやりたい人たちが多く、こうした医学とかやってみたくは思っていない。しかし、よくよく話を聴いてみると、凄くできるデザイナーで、「昔からNewtonが好きで」「親が医者で」なんて人が見つかったりする。

Q 見る人がお金を払う価値を見出すようになるのか? 見る側が無料では続かないのでは。

A お金を払ってまで、となるのは命が懸かっているというレベル。であれば、医療コンテンツには十分に価値を見出しうる。他の病気についてのCGがどんなにあっても、自分に関わる病気についてのCGがなければ意味がなく、そういう意味で、医療コンテンツは量を用意することが価値に繋がるのです。

■その他のイベント

◆プレゼンコンペ

7月24日(木)、30日(水)、8月1日(金)に、GCLプレゼンコンペが開催され、GCLコース生M2とD1による研究内容の発表が行われました。

プレゼンコンペの主な目的は、M2/D1のGCLコース生の研究の進捗状況等を、教員、外部プログラム担当者及びGCLに関係する学生の間で共有することです。併せて、外部プログラム担当者に指導、評価等の担当をお願いするGCLコース生のマッチングを検討する際の参考とします。さらに、GCLコース生の研究がいかにGCLプログラムに繋がるかについてのビジョンを各GCL生が描けるようにすることも目的としています。

当日は、23人のコース生が発表を行いました。

◆インターンシップ・ガイダンス

8月4日(月)に、学生対象の「GCLインターンシップ説明会」が開催されました。

GCLのコース生は、2年次に、国内・国外合計6ヶ月のインターンシップが必修コースワークとして課せられています。

説明会当日は、この必修のインターンシップの概要説明のほか、インターンシップでの経験や成果をどのように修士論文に活かすかなどについて、浅見徹教授から説明がありました。

また、すでにインターンシップを体験した学生による体験談の発表が行われました。

さらに、GCL特任教員の学会等出張の際に、コース1年次の学生が同行することで、インターン先の選定などに役立てられる、GCLならではのシステムについて、村井昭彦特任助教が説明しました。

■ イベント告知

◆ 2014/9/7-8 GCL 合宿

1. 趣旨

(1) GCL 関係者全員が集い、相互理解を深めると共に、「ICT を基軸とした社会課題解決や社会変革」について共に考えることで、今後のコラボレーションの基盤を培う。

(2) 指導教員、GCL 特任教員、学内外プログラム担当者、RA が現コース生の研究・活動状況を把握し、意見交換することで、今後の GCL 指導に資する。

また、専攻における研究活動と GCL 活動が有機的に連携し、より高い相乗効果を発揮するための検討にも繋げる。

※ GCL 関係者とは、GCL コース生 (M1, M2, D1), GCL の RA, TA, プログラム担当者 (学内外), GCL 特任教員及び GCL コース生の指導教員をさす。

2. 内容

(1) ショットガンセッション：全員が各自 2 分以内でプレゼンを行うことで、相互理解の糸口とする。

(2) テーマ別討論会：全員が複数グループに分かれ、「ICT を基軸とした社会課題解決や社会変革」に関する個別テーマについて集中議論し制限時間内に提案をまとめる。

全員が発言し相互理解を深めると、構成力を伴うリーダーシップや協働への気づきを目的とする。

(3) 社会のリーダーと語らう：実社会を動かしてきた外部プログラム担当者や異分野の専門家 (教員含む) と語らい、学生が自らの将来について考える材料を得る。

◆ 2014/09/18 (R2P) Global Design Lecture & Leading Researcher Cafe (LRC): 「地理情報のもたらすもの」「計測・シミュレーション・ロボットを用いた人間の運動原理理解」「アウトソーシング戦略—中国における日本企業のソフトウェア開発」「オフィスワーカーや観光者の行動をログ分析から理解する取り組み」

・ 2014/09/18 (R2P) Global Design Lecture

「地理情報のもたらすもの」

編集・発行：

情報理工学系研究科・GCL 広報企画

(森友亮 (情報理工 D1)、荒川拓 (学際情報学府 M2)、柴山翔二郎 (工 B4)、曾我遼 (工 B4))

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学工学部 8 号館 621 号室 GCL 事務局

E-mail : pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp

・ 2014/09/18 (R2P) Leading Researcher Cafe (LRC)

「計測・シミュレーション・ロボットを用いた人間の運動原理理解」

「アウトソーシング戦略—中国における日本企業のソフトウェア開発」

「オフィスワーカーや観光者の行動をログ分析から理解する取り組み」

日時：9月18日(木) 14:50～18:30 (開場：14:20)

場所：工学部2号館(3F) 電機系会議室 1AB

◆ 2014/11/15-16: OECD 学生閣僚理事会・参加者募集 (2014/9/15 〆切)

会 期：2014年11月15日(土)~16日(日)

場 所：東京大学 本郷キャンパス 工学部 2 号館 1F 213 講義室